

元季
名寄

合類俳諧忘見
冬

911.3

フ

冬

住吉神送

冊日

神輿玉手島假宮へ渡御禊ぎヲ修ス是ヲ御管板ト云出雲石ト云所ニテ祢宜出雲ヲ遙拜ス是ヲ俗ニ神送ト云

冬

釈名ニ冬ハひゆニハゆハ寒ニひふ相通す

増セニキヨク
顯頊

帝○魏相曰北方之神顯頊乘坎執權司冬云々顯頊黑籍之君

玄冥

神○月令冬月其帝顯頊其神玄冥云々玄冥

水官之臣少皞子之子曰脩曰熙相代為水官左傳脩及熙為玄冥是也

元英

神○月令冬月其帝顯頊其神玄冥云々玄冥

上天

全書冬為上天是也

羽音

月令具音羽律中應鐘

玄冬

其意冬曰玄冬

三冬
九冬

十月

三才門

十月

神冬月 時雨月 陽月 十月純陰而稱陽月 以陽根干陰為之始 初霜月

補良月 以盈數 為良月 孟冬 上冬 初冬

小春 小六月 增應鐘 律○月令廣義鐘者動也 言物志陽而動下藏也

立冬 節小雪 十月之中 下元 十五 正月ノ上元ニハ天官福ヲ玉 日七月ノ中元ニハ地官罪ヲ

免ス此下元ニハ水 官厄ヲ解スルヨシ 綿布 時雨 風

爐用 炬燵 茶口切 利休曰壺口切之節 燈黃搗綠時云々

瓢の炭取 玄猪 亥ノ子餅ノヲ 食門ニシルス 雪垣 北窓閑 北凡

シニ閑ル意ナク テハ季ニナラス 細代 細代守 細代本

冬 竹筍同シ和名宇倍和三寄筍 柴漬 生柴連枝葉伐之三 四尺余河水浅処漬

之高出水面徑四五尺寒氣嚴則雖止水亦凝於 茲張網柴四方撒其柴魚驚走入網別以細執之 干菜釣 菜

トバカリ ハ春ナリ 麦蒔 炭竈 炭焼 炭賣 小野

城洲ニ白炭ハ河内 同光滝土人焼之 衣與 冬ノ夜山中ニ歎ヲカルニ犬ヲ引

内ニモ狸狩 ヲ云トゾ 初氷 初霜 初雪 芳初雪のふ日群 玉系内一竹と初

雪見系といひ云々 けり絶て久云々

十月

氣形門

鵝 鵝氏書大如雀而致黑有白形 鵝ノ黒背翻灰赤有 黒斑翅上有白羽黒羽層々常脚茶黒其色清亮身嘽亦一種黃鵝

尾越鴨 鶯のさし 鶯の子 氷魚 按名抄曰切鰯云鰯今 和三日鮎氷魚狀鰯白魚大寸許延喜式山城国 近江国氷魚自九月至十二月貢之是謂氷魚使

魚 狀似鰯而 円長茶黒

色眼大潤漁人作
蕭阿州之産為上

十月

艸木門

菊花

殘菊

枯尾菊

菊茶

荻萩菊
其外モ

ハツタ花

白花ヲ開キ実ナル和三五六月花ヒラクト云々又
云種ノ先細白花コナリテ四ク黄弁俱ニ五出ニ

落葉木

木の葉

朽葉

石路花

黄花ナリ是山
フキカト云々

山茶花

時珍曰其葉可
作飲故得茶名

松の茶

小茶碎白色結子小
青色五月熟黒色

茶の茶

枇杷花

花

櫃の茶

和三人呼テ野杉トス其木櫃ノ如シ木ニ北壯ア
リ壯ハ華キテ北ハ実ル冬月黄円花ヲ開キ実ヲ

結フ大サ小葉ノ如シ其木火ニ熏メ蚊ハ其香ヲ惡テ去リ蜈蚣ハ其香ヲ
喜テ慕来ル凡好不好ノ異如此モノ委シトソ吉野ヲ名産トス

柳花

蕎麦花

大根引

莖菜

茶引

十月

服食門

粥入

粥衣

亥の子餅

上臈日黒キ餅ヲカモハ
食テ百病ヲ除ク
冬瓜
カモハ
毛種ノ

和名ナリ此瓜白
毛種ニ似タリ

十月

公式門

孟冬旬

朔更衣

天を南極ニカ所ありて雲をナリ更衣の衣を
二献の後水盃とナリ水よりハ歳を奉る

公々以下未嘗にく射る天子所をのたふの猶こらふ
をたふらるこれ群臣とひとくを射るより

群臣詩を伴
て酒を初

神の留す

神の族

達磨忌

紹興二年十月五日

法華會

公乎に南都無福も小て九月晦より七ケ日の
間南無寺に　くぬほの太倉をひく　　むはハ

あり長國大臣内膳の御忌日によりて、

十夜

三

十五日 洛東真如堂天台ノ本尊吳騷ニヨツテ別時念仏ユイマエ維摩會モウミカウ
マテ ヲハジム是ヲ十夜ト云永亨ノ比ヨリ始ルトゾ無行

寺にて十月十日より十六日迄七日間の百練方終りしに
大鐵冠の市忌日あるにハシ之を市致之と臣痛恨をあらわし

て今ハと之を子に下し、人海
を痛まらば痛くおろき々に大匠の水病ありせ給ふより聖て大衆

北野天神の御方にも名同三國舍漏具福助

之ヲ蓋是ナカト作
ラセ給ヒ多クナリ

令以羅奈

日

讚州象豕山祭神一坐或
云三輪大明神一說云素

至焉尊變作ニメ大比敷大明神則山王權現也傳教大師歸朝之時勸
請也今日込國人群集ス又以崇徳院廟世奉祢金毘羅神是合崇之故乎

芭蕉忌

日 十 二

御令撰

十三日

聖一忌

十七

東福寺開山忌也。是為
洛人年中遊覽之終。

管子

廿日
哲立排

官者殿京極四條
鎮坐此社不詳何

神俗傳此神令免偽盟之罪故今日商賈詣此社稷欺賣之罪是曰誓豆之稷

序

一向宗門ノ
報恩講ナリ

大社神夏

神集

神在

大社神祭大神宮在出雲國神門郡杵

三十三丈今減八丈是也社日神即素盞鳥尊相殿三坐コス下社大日貴即天照大神相殿五坐

七月コハニ十一日ヨリ十
テヲ齋ト称ス

神迎

三冬渡門

寒

而散

音線雪粒也。○霰字彙音薄雨氷。○雹ハ和俗ニ云雹四
季ニアリ霰ハ和俗ニ云アラレ冬フルモ亦霰ハ

ホタハ火ヲタ
モツノ畧也
火鉢
火桶
古制の國內ハ其後ホの
アハハ相の本をくうを家

或ハ本也或ハ沿うだ其う
務色の陰をいさるおあり

手焙
増手焙

懐が
炉
火爐
埋火
圍炉裏

焼火
暖補
温石
炭風呂

氷
補
陸水
密氷
氷柱

牙
月牙
星垣
補
狩

枯野
朽野
月雪
水涸ル
瞬

雲
雲
雷
千
友

小ねおる
和三
鶴三指前二後一
鶴三指前二後一
鶴三指前二後一
鶴三指前二後一

木兒
和三
白彪相乱似蛇腹文
白彪相乱似蛇腹文
白彪相乱似蛇腹文
白彪相乱似蛇腹文

水鳥
浮寝鳥
鴨
玲鴨

鷺
鷺
力草
鷺

鷹
小鷹の名ハ
七月に出る
隼
隼

とて
とて
とて
とて

とて
とて
とて
とて

とて
とて
とて
とて

とて
とて
とて
とて

ミソレ 両訓アリ
アラレ 雑ナルヘシ

雲 雨雪雜
下也

冬の日

短日

冬安き日

冬月

冬籠

冬攝

山眠る 冬山ノ形

容ヲ

擗火

擗炭ハ風村ノ根ヲ掘取テ燒ク擗トバカリハ炭ニ
燒又以前根ヲ掘出タルヲ云埋火ノ用ニ和訓義解

ホタハ火ヲタ
モツノ畧也

火鉢

火桶

古制の國內ハ土器の桶のうゝを以テ
其外ハ木の桶をくりこむを以テ

或ハ木地或ハ漆を以テ其うゝ
粉をのほをいさゝかおあり

手焙

増手焙

懷炉

炉

火爐

埋火

圍炉裏

燒火

暖補

酒を以テ

温石

居風呂

氷

補
氷

陸氷

氷

氷柱

月

月

星

補
陸氷

狩

枯野

野

月

水

涸ル

瞬

戰

震

雷

千

友

小ねおを

木兒

和三兒種獸馬
三指前二後一
和三大如兒鶴而全体褐黑色有白彪似豆者胸横有
白彪相似蛇腹文跋目如猫服外作白圈服能旋轉

水鳥

浮寝鳥

鴨

珍鴨

鷹

鷹

鷹

古今抄ニ雜トナリ季トナ
ル云々但鳥ノ別名ナリ

鷹 小鷹の名ハ
七月ニ出ス

鷹

鷹

力草

鷹を以テ云々
鷹を以テ云々

鷹 鷹を以テ云々

鷹

鷹 鷹を以テ云々

鷹

鷹 鷹を以テ云々

鷹

鷹

鷹

鷹 鷹を以テ云々

鷹 鷹を以テ云々

鷹

鷹

鷹

鷹 鷹を以テ云々

鷹 鷹を以テ云々

鷹

鷹

鷹

鷹 鷹を以テ云々

冬木立

冬葱

補葱

水仙

專ヲ十月ナルハナレト冬ハ花ノ少ナレハ

三月ニ渡ルヲ加減
氏賞觀トモ云ヘシ

落の塔

古今抄ニ落ノ芽ハ春ニメ一
物ニ用ノ例ト云ヘキトソ

大根

冬櫻

冬櫻

小樹シを榮彼岸ヲ似て其枝た
れ冬月をを早ク榮益ニ施て

美す又ハ八重
襦あり縹あり

帝衣

帝衣

和ニ被平衾金襴衣
類名不犬被曰衾單

被曰襦三才國繪所國被似蒲
國既謂寢衣可有襟袖也云々

夜著

蒲室

蒲室モト蒲及ヒ箱
藁ニテツクル今緒

布ヲ以テツクルト
イヘ氏蒲固トイフ

氏巾

踏皮

帝衣

綿帽子

京師婦人被を用ひさる雪友ハ履
帳子を用ひきハ綿帽子を用ふ

紋汁

河豚

紋汁

納豆汁

海風湯

霰酒

霰酒

二名トモニ南都ノ産ニ同種兩名ナリ
酒中ニ霰ニ似タル糟アリ故ニ名少

鷄卵酒

酒

精壯氣調脾胃先用水五盞麴上黃衣一盞砂糖半盞
鮮鷄卵一箇去殼取汁投干湯中攪々攪合乘溫飲之此宜不嗜酒人也或用
鷄卵一箇破開外殼滴盡干煎
酒中以箸攪攪之乘溫而飲之
生薑酒
生薑酒治肚腹凍腹及冷積用生
姜去皮礱上研爛和味嘈炒鍋下

取其焦粘入好酒煎沸
一兩次乘香而飲之

茗茶湯

雷海苔

風呂ふき

切子

〇奈

十一月

三才門

霜月

杓杓月

雪見月

天心月

十一月建子周之正
月是曆家曰天正月

也

復月

一陽來復スル故ニ増
後月ト稱スルカ

仲冬

黃鐘

律〇月
令仲冬

三冬十一月

和名太之美止

利又佐々木

○木曜

生油

和名三

二似タルヲ以テトヲ云金海鼠ハ
金花山海辺ヨリ出ル金色ヲ帶フ

冬木立

冬葱

水仙

水仙

專ラ十月ナルヘケレ
ト冬ハ花ノ少ケレハ

三月ニ渡ルヲ加減
凡賞觀トモ云ヘシ

冬路の塔

古今抄ニ落ノ芽ハ春ニメ一
物ニ用ノ例ト云ヘキトソ

大根

冬櫻

冬櫻

小樹ニ花葉彼岸様ニ似テ其枝た
れ冬月をを穿ク葉益ニ枯テ

裳す又ハハ衣
襦あり縹あり

帝衣

帝衣

和名被和衣金襴衣
大被曰金襴衣

被曰襦三才國絵所國被似蒲
國既謂寢衣可有襟袖也云々

夜著

蒲衣

蒲衣モト蒲及ヒ縹
藁ニテツクル今結

布ヲ以テツクルト
イヘ凡蒲固トイフ

踏巾

踏皮

帝衣

綿帽子

京師婦人被を用ひさる雪友ハ履
帽子を用ひ冬ハ袴帽子を用ふ

絨汁

河豚汁

鯨鯨汁

納豆汁

海鼠湯

霰酒

霰酒

二名トモ二南都ノ産ニ同種兩名ナリ
酒中ニ霰ニ似タル糟アリ故ニ名ナリ

鷄卵酒

鷄卵酒

猪壯氣調脾胃先用水五盞麴上黃衣一盞砂糖半盞并煎之數十沸別用
鮮鷄卵一箇去殼取汁投干湯中頻々攪合乘溫飲之此宜不嗜酒人也或用

鷄卵一箇破開外殼滴盡干煎
酒中以箸頻攪之乘溫而飲之

生薑酒

生薑酒治肚腹凍腹及冷積用生
薑去皮礱上研爛和味噌炒鍋下

取其焦粘入好酒煎沸
一兩次乘香而飲之

若る麦湯

雪海苔

風呂ふき

切子

○奈

十一月

三才門

霜月

杓杓月

雪見月

天心月

十一月建子周之正
月是曆家曰天正月

也

復月

一陽来後スル故ニ増
後月ト称スルカ

仲冬

黄鐘

律〇月
令仲冬

三冬十一月

三冬

餐豆

補
氣
壯

凍ノ字

雨傘を忘ゆきハ時雨に月が照
 たりと云ふ一掃きハ時雨と雲

と風と三色ニ云ニ蕪葉は説ハみぢれ風の係と。ふて言ときく。と。
 詞の詮なうくんうな出と措の言を吹炭をすとあり。け説可あり。

東を解れたる道と

六のむ

て花とある故に六出に六補
ハ陰數陰花といふる也
雪ツク碌ロク
雪ツク女メ
深山フナヤマ稀ハルカ
二現ニゲンス

雪ノ精ナリト云ハふくみきり
ひゝ名たひゝ雪ハあれたのけく清きをひゝ
ひゝ雪とつづるやなび

雷車

和三輶俗云曾里以松爲之其州效箕擲行泥上者也本邦所用之雪車

十一月

氣形門

郭璞云鷓鴣夜鳴求旦之鳥夏月毛盛冬月裸體晝夜鳴叫故曰
寒號曰鷓鴣○其形如小鷄四足有肉翅○《公經》大雪山有鳥夜

苦寒鳴邑寒苦責身夜明造巢明又今日不
知苑亦不知明日何故造巢安穩無常身
魚
倭名コホリウヲ鰯魚白
魚ニ似テチリメニザコ

トス春ハ尋ク川ノ浅キ処ヲ上ル故ニ一名サノ
ボリト云愚按ニ土地ニヨリテ夏モノボルカ

初師

初鯨

鯨舟

ヲ鯨
鉸モリソ
トク
云鉸

杜父魚カク

宛然也

擿取

十一月

艸木門

芽張柳

室暖

椿

冬牡丹

八月ヨリ
葉出ル

冬至梅

單葉
中花

紅亦八重
中花浅紅

人參引

胡蘿蔔

太山榴

和三樹葉似榴而葉
不鞏四月開細白花

秋結子赤色似仙靈子○花量齒華訓深山榴深山多ク産スソノ木高ク上
ラス偃臥メ藤蔓ノ如シ葉莖ノ蹶ニ生ス冬ヲ凌テ凋マス形沉丁花ノ葉
ニ類メ長大ニ冬梢間ニ五出碎花ヲ着ク總ヲナレテ
藤生ス粉紅褐色ノ実ヲ結フ云々右兩説異ナリ

梅椿探

中雪

ノ意ナリ詩
ヨリ出ル欽

藺ヲ極ル

生薑掘

十一月

乾鯉

服食門

十一月

公式門

朔旦冬至

朔日冬至ニアタレハメテタキ祥
瑞ナルニヨリテ公卿賀表ヲ奉ル

一陽嘉節

至

祝也

ノ日ヲ一陽正来復正増

曆奏

日

公事に中務省より明年の曆をもち
むうハ主上南殿にお祈りありて是

を祈るるお祈りふき付ハ内侍不につく中畧十一月ハ一陽始て生
す月ふれハ一年の曆数を考へて今日天子にあらはるる

新嘗會

中

会又祭トモ是ハ天照大神を勧饗なされて祈みの
今年のもろ穂を神にささぐるをたす儀あり

豊明節会

中

公事には是ハ年の福を計るをうして今日君もきこ
しうに下にもう一たび若菜新なる中畧大炊別當大

十一月

十一月

艸木門

芽張柳

室咲

椿

冬牡丹

八月ヨリ
葉出ル

冬至梅

單葉
中花

紅亦八重
中花浅紅

人參引

胡蘿蔔

太山摘

和三樹葉似梅而葉
不鞏四月開細白花

秋結子赤色似仙靈子○花曇齒訓深山極深山多ク産スソノ木高ク上
ラス偃臥メ藤蔓ノ如シ葉莖ノ跃ニ生ス冬ヲ凌テ凋マス形沉丁花ノ葉
ニ数メ長大ニ冬梢間ニ五出碎花ヲ着ク總ヲナレテ
簇生ス粉紅褐色ノ実ヲ結フ云々右兩説異ナリ

梅椿探

中雪

ノ意ナリ詩
ヨリ出ル欽

蘭ヲ極ル

生薑掘

十一月

乾鮭

服食門

十一月

公式門

朔旦冬至

朔日冬至ニアタレハメテタキ祥
瑞ナルニヨリテ公卿賀表ヲ奉ル

一陽嘉節

冬至

祝也
ノ日ヲ一陽正来復正増

曆纂

朔

公事に中勢省より明年の曆をまら
むうハ主上南殿にお祈りて是

を祈るるお祈りふき付ハ内侍不につく中畧十一月ハ一陽始て生
すハ月あれハ一年の曆数を考へて今日天子にあらある

新嘗會

中
卯

会又祭トモ是ハ天照大神を勧修なされて祈みの
今年のもろを神とまをたより一候あり

豊明節会

中
辰

公事には是ハ年の福を神とまをうして今日君もきこ
しう一候にあらある中畧大御別當大

十一月

艸 年
乙 亥

佛堂階の下に臥し下つきて仕舞ふを少す。飯盃をて杯をたぐりて焼く。し
て少く納金を納めてうゝ下着。○小忌衣青摺の衣とも。つゝ白布に

小菰柳水子教降小菰山莖の紫ひです。○日禰糸日莖蔓さかり莖ハ
炭にさがりとも若元日莖のつゆともりし汁多る時若ハ此莖を煮て

あり 中末次第あり
サトカクラ 内理の外と悉く一なり子

子祭
日

相嘗祭

公事に曰神祇令之ハ大儼住吉大神オホソギノカミ穴師アナシ恩智オンチ玄智オンチ葛カ葛カ鴨紀伊國日前ホ
ニ神々各友部とラけて五部ハ近きハ死てさそ那ナ○各々公官意の

後宮の御形社の系氏人これをなりと
神田心姫命湊織津姫命市杵島姫命の三神

山科祭

已上

申上
註四月
アリ

吹草フイ草祭

諸社僧之各其緣日異也八月輪荷却火燒也積柴於神前供神酒然後投火而燎之兒童各口唱某神拜火燒而拍之輪荷又金

山祇命ニ山林ヲ持傳ル巖内ノ村
民此月山神ヲ祭ルト云ルハ即火

十三
紀夏堂也
堂在四茶

坊門南堀川東空也晚羊為修行出京師赴東國日謂徒弟云今吾已老矣再
歸難為必則今月今日以出寺之日為忌日故用今日修法事斯院中有十八

家其中年老者剃髮着衣為僧代々以空字加諱字其來不剃髮帶妻子常製茶筍而賣市中允斯徒謂鉢敲入米錢畚以甄換鉢

中
二月二

中 四月ニ註アリ

度ノ祭句体ニ其季ヲ定ヘシ愚按ニ同季ノ句去ニハ句体ノ差別
アルヘシサモナキ時ハ句体ニヨラス季ニツレテ季トスヘシ

十一月十二月

大沙彌

廿一日ヨリ
廿四日マテ

廿四日ハ天台智者大師ノ忌日ニ俗間ニハ大講ヲ修シ赤豆粥ヲ食フ是ヲ智慧粥トイフ

伊仁事

廿二日ヨリ
廿八日マテ

内書月

張恩禪

京都西本願寺并諸國掛所ニテ修

之廿八日ハ開山親

御祭

廿七

春日若宮祭礼ニ祭神天押雲命云々廿六日流鏑馬ア

寫聖人ノ忌日ニ

リ亥刻許神樂アリ旅所ニ辻シ奉テ音楽相撲等アリ廿七日金春金剛船ノ立合觀世宝生弓矢立合舞之夜ニ入還幸日使トハ関白殿下ヨリ奉ラ

日ナ

宇賀祭

晦

九條東洞院宇賀辻
日 氏又振州住吉トモ

十二月

三才門

師走

以月信を迎へく仏名と稱ひ或ハ淫と云ふを東西とけせり不敬なり

春待月

福月

説文曰冬至後三成爲臘祭百神也漢成日福履日晋丑日○臘者獵也因獵取獸以祭先祖云々

梅初月

初月

補

三冬月

季冬

大呂

律○月令廣義曰也陽氣欲出陰拒之也

小寒

節

大寒

十二月ノ中

乙子朔日

補乙子餅

室の又

室の又

室色ど

室旅祝

海敵十一月

ノ下ニ

室念仏

事始

十三日ニ正月のりと始るニ

門松

或ハ門松

ノ下ニ

掛乞

煤拂

煤拂

歳暮礼

るを歳暮の

年忘

年貢納

古抄新抄秋冬マキクニ着駅巻ヲ以テ冬トシ秋ニツレル

年木樵

和俗民間ニ春の用意に於ヘ巨薪柴の敷セリ

古曆

曆の束

終る曆

曆の果

曆巻納

年用忘

節分

豆打

於指

觸除さす

此二物ハ疫鬼ノ畏ルユエニ禁中追儼ハ晦日ナリ又同ノ公

賤納年

五條天神ハチ大己貴
命少彥名神二坐云

破弓羽子板

曆賣

廿二日より廿七八日
までありて止む

大晦日ノ夜高キ岡ニ登リ蓑ヲ倒ニ着テ遙ニ我家
ヲ見レハ明ル年アルヘキ吉凶ノヲ見ユルトナリ

浅の底砂に季のくれの敷こは極月廿六より除夜のふも
もより除夜の敷こを和りかたるといふ事

補別歲

方原雅喉寢

節季

十二月

氣形門

鵲巢造

鵲始巢
トモ

増ニトリノル
鶏シ

大寒ノ候ナリ亦大寒
後十日始乳ストモ

八目鱧

寒鯉

寒和國鯉取

其和田ハ常陸國ナリ
魚稍肥テ脂亦多シ

十二月

草木門

早咲

寒梅

寒椿

寒笋

孟宗竹

寒菊

年の梅

十二月

服食門

衣祀

正月小袖をきするニ又りハ料ニ袴配リハ女樂
をせし人ときりしとて先ツ袴を配らるニ云々

寒晒

寒の餅

寒酒造

茶喰

臘肉牛肉等
麩賣トモ

凝餅

蒸メトメ凝リ
タルナリ

凝り

トバカリモ

餅搗

餅花

餅造

十二月

公式門

十二月

地
新仙名
公事に十九日より廿一日まで三ヶ日あり、宣
ハ一振も倒れず、仁惠殿の牌をさへし、と
内帳の中にかけて廟の額の間に又蘭が二机をとり、仏像塔形をおく
仏あり香花ありを飾り、座に地獄變の市屏風をたけ、中畧琴呼びかけ
臨翁燈柁木の如意床のすまゝ暗黒は仏名といひ、
三世の法化の女名を唱へて六根の罪を滅するんこ
公事には主上御幸あり、先ッ典侍當侍着きつけ、ハ、二人こそ下とさせ
さす内付示し給ふありぬれと祈拜乃自視あり、カ下啼公は思産あり、安
人を嫌むべく、伶人白砂の肉候一樂志を預め、復る寺計樂指荷前使公
撰吉日先十三日にいそいで来て、空々寂寂ハ公のちも殿上のもの
次返すひたり中畧侍来るとハ十陵ハ墓へ年の路りと常命をさへすと
之○十陵ハ山階山陵天智後田原光仁拍原桓武長岡ハ篇禁道深州仁
明鳥部後田原光孝小野後山階磯田原トハ島ハ和州ニ其外ハ城
州ニハ墓ハ大和國一所尋武峯淡海公山城國七所後愛宕忠仁公高富仲
野親王河島當宗氏宇治昭宣公小野高藤公小野宮道氏小野皇太子班子



合類俳諧忘貝終

書

肆

東都

須原屋茂兵衛

浪花

河内屋茂兵衛

越前福井吳服町

鷹屋與兵衛

皇都

大友字屋与三兵衛

野田治兵衛



合類俳諧忘貝終

書

肆

東都

須原屋茂兵衛

浪花

河内屋茂兵衛

越前福井吳服町

鷹屋與兵衛

皇都

大友字屋与三兵衛

野田治兵衛

